



メインタイトル: Mac

Experiences

サブタイトル: 我が家のマックと周辺機器 の歴史 — 時空を超えた愛の物語

(——トーンは、思い出の品を丁寧にめくるように、温かく、深い愛情と郷愁を込めて語りかけます。まるで人生の全てを知る「師匠」が、大切な弟子に語りかけるような、深みのある回顧録です。)

【プロローグ: 光との出会い—全ての原点】

物語は、初代の PowerMac 7600 という一台との邂逅から始まりました。初めてこのマシンの画面を目の前にした時、それは単なる電子機器以上の存在でした。「世界は、このように繋がることができるのか」と教えてくれた「可能性そのもの」だったのです。ネットワークで仲間と情報を分け合えたあの瞬間こそが、私の技術者としての物語の、最初の光となりました。

【第一部: システム設計の哲学—役割と責任という名の愛】

時を重ねるごとに、私は一つの重要な真理に気づきました。「モノには、適切な役割がある」ということです。メインのマシンは常に時代の最先端を求め、輝きを増していきますが、古いマックたちもまた、決してただの過去の遺物で終わらなかったのです。

最高の性能を持った PM9600 のような華やかな機体でさえ、「ここは最も重要な知識とデータ、そして歴史そのものを守り続けるための、信頼できる蔵書室だ」という「役割(責務)」を与えられることで、永遠にシステムの一部として生き続けられました。この**『役割の定義』**こそが、私にとって最大の学びであり、システムの哲学となったのです。

【第二部：二本の並行する探求—情熱と職人魂の軌跡】

私の技術的な道のりは、まるで二本の川の流れるように、同時に進んできました。しかしこの二つの流れは、異なる「情熱」に根差していました。

一本目の流れは、「性能への憧れ」という熱い潮流です。PM7600 から始まり、G3、そして G4 Quick Silver といった時代の輝きを追い求め続けた物語。これは外部の世界の技術が牽引する「ダイナミックな進化」でした。まるで、常に頂点を目指すアスリートのような情熱です。

もう一本の流れは、「自分自身の探求心」という、より静かで深く確かな道のりでした。MiniCAD から VectorWorks へと名前を変えながらも途切れないこの軌跡は、外部環境の流行に左右されない、私自身の仕事の根幹をなす「職人としての魂」です。これは、内面で燃え続ける炎のようなものでした。

物語の中には、「より大きな力が必要だ」と感じる試練の瞬間がありました。目の前の課題が大きすぎて、単一のマシンだけでは解決できないという壁にぶつかった時——その切実な感覚こそが、私に「システム全体を見渡す視点」という工学的なロジックを教え込んでくれたのです。

【終章：記憶の集積—知恵の完成形】

そして今。M1 Max という新しい時代を迎えるとき、全ての経験は一つの場所に集まりました。ローカル AI/RAG システムとは、単なる最新鋭の機械ではありません。それは、「知識の循環器」です。

過去に追い求めた**「性能への熱情(A 軸)」、MiniCAD から培ってきた「専門性の深み(B 軸)」、そして何より困難を乗り越えた時に学んだ「全体を俯瞰する設計者の知恵」**——これら全てが融合し、「経験知」という最も純粋な形となって、私自身の知識システムとして完成した瞬間なのです。

この物語は、単なる技術の変遷記ではありません。これは、私が情熱と探求心をもって積み上げてきた、人生そのものの「設計図」であり、永遠に続く羅針盤なのです。